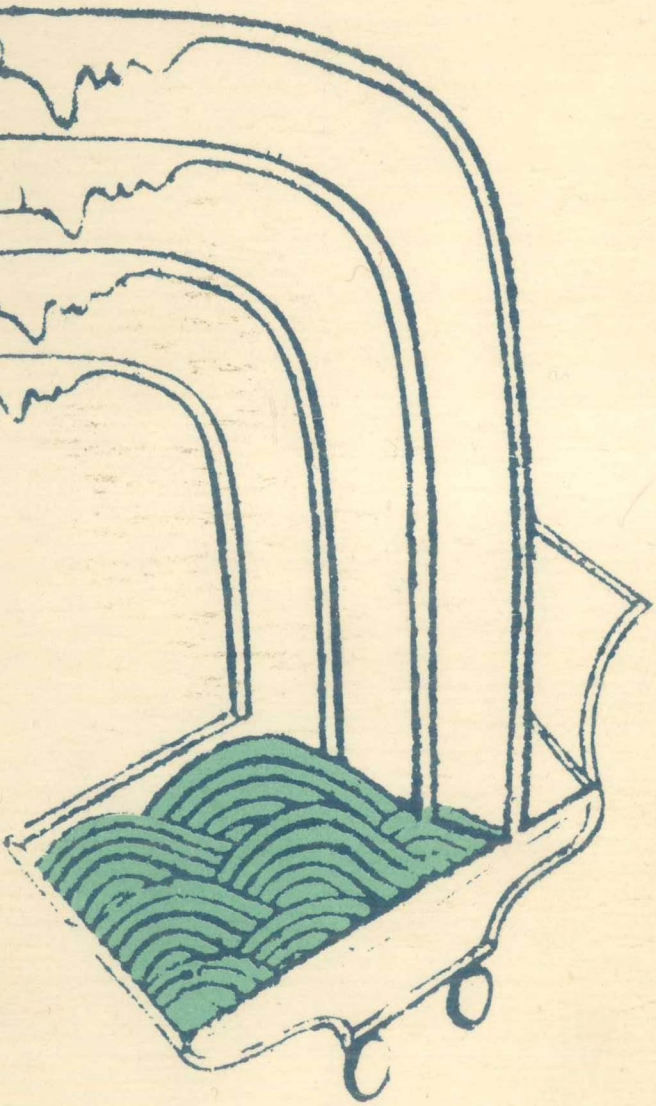

死をみつめて

毎日新聞社 編

死をみつめて

毎日新聞社 編

毎日新聞社

死をみつめて

昭和五十三年八月十日　印刷
昭和五十三年八月二十日　発行

編　者　毎日新聞社
編集人　高杉治
発行人　高原富
発行所　毎日新聞
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ
〒五三〇　大阪市北区堂
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋
〒四五〇　名古屋市中村区名

印刷　図書印刷
製本　大口製本

目

次

村松　剛　11
死と現代　世の中は娘が嫁と花咲いて
死者の魂　無明の闇と花
中野　好夫　20
○○○　未だ生を知らず況や死をや
葬式は迷惑　死に親しむこと
串田　孫一　29
死の恐怖　頓死是非
死者の支配　器用な終わり方
加賀　乙彦　38
ガン患者の死期　安楽死
死刑の宣告　死後の世界

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

富岡多恵子　47
誕生日と命日　老いと死
ヒトだけの宗教　死の水割り
森　敦　56
死者は「月山」にあり　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ
曽野　綾子　65
墓地好き　永遠の前の一瞬
総決算の時　一枚の葉の死
なだいなだ　75
無感動　葬式ぎらい　墓ぎらい
死全体が見える年齢　死はいい文章の句読点

大原健士郎　84
二つの心　臨終
遺書　親子心中
北森　嘉蔵　93
考える　ゲーテの場合
みんな仲間　お互いさま
鯖田　豊之　102
病院か自宅か　対照的な死後のすみか
カレン裁判以後　不要になった安楽死？
澤野　久雄　111
死の知らせとそのあと始末　せめて死後には自由を
死が安易に扱われすぎる　いまはのきはに何を言うか

草野　心平　120
木内克　続・木内克
サチその他　親戚大移動
城　夏子　130
恋亭主の死後　死んで花実が……
佐藤春夫と森田たま　豹変
開高　健　139
れくいえむ I II　死を忘るなかれ
女と、猫と、カーペット
高瀬　廣居　148
二つの顔　死者への脅えと涙
死との和解　立派な死と惨めな死の違い

川上　武　157
戦争と平均寿命
絶望しない患者
レーニンの遺体はムラージュか
百歳への挑戦は可能か
金岡　秀友　166
不死の時代の哲学
生き恥と死にがい
死と不可知論
老と死への準備
杉森　久英　174
みじめな一匹の犬
おれだけではないのだ
「他人事」だったのに……
生きたいと思ったこと
日高　登　183
ある日、理想の父親が
老後のあり方とは
死に対する無感動がこわい
人生最大の課題

田中小実昌　193
いい気なもんで　かわりのカンフル注射
死ぬ知らせの手紙が　こんどはコレラ
進藤　純孝　202
死ぬことを忘れる　友人の死
最後の一句　死の直前

裝幀　三代澤　信壽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死をみつめて

（サンデー毎日に五十一年四月十八日号～五十三年三月十九日号まで連載）

死と現代

村松　剛

人間はだれでも死ぬということは、当りまえの事実だが、その当りまえすぎることがらに決して馴れることができないのが人間というもののようである。

たったひとりの娘を失ったある母親は、みちを歩いていて同じ齢頃の娘を見かけると、どうしてあの子は生きているの、といって泣いた。これはじつは筆者の祖母のはなしで、親の心とはそんなものであろう。人間にとって近親や友人の死は、つねに事件である。

齢をとって自分の生命力がおとろえ、顔にしわがふえることにたいていの男女が苛立つ。死が目前に迫れば、自分もまた死ぬという事実にはじめて気がついたかのように、これもまたたいていがうろたえる。

死を「自然の事」と、平安朝末期ごろの武士は呼んでいたらしい。軍記物を読むと、そういう表現がしきりに出て来る。まさに「自然の事」であるに、ちがいない。しかしそれが自分を含む万人の上に確実に起こると知っているのは、あらゆる生物のうちで人間だけである。そこで人間は、この厄介な問題と対応するのに情熱を傾けて来た。

古代の帝王たちは、エジプトでもギリシャでも日本でも死後の永生を夢みて、巨大な陵墓をつくらせた。仏教は逆に生への執着から離脱することを、つまりは死を日常化し死に「馴れる」ことを、工夫をこらして説いた。一神教は生も死もすべてが神の意志の所産であると教え、そのなかのあるもの——たとえばキリスト教——は、死後に天国があると約束している。

死の想念をべつとしては、文化そのものが論じられないのである。そしてその死の想念の輪郭が、はなはだ不明瞭になって来たのが現代であるように思われる。人間が死後に期待した信仰や、死に与えた栄光を、現代は次々につぶして来た。来世も天国もなく、どのような死も要するに死であってむなしい犬死と変らないと、当節の常識は教える。もしそうときまれば、死は何の意味もない不幸だろう。

伽藍も神殿ももたない史上はじめての文明を、現代は経験している。いいかえれば、死

からのつよい救いをもたない文明である。それが「進歩」だと漠然と考えられているのだが、人間はこのような状態に本当に耐えられるのか、どうか。思うにそこに、現代の内包するいちばん基本的な問題がある。

死に何の意味もないとすれば、生を究極とする生も索漠として来る順序である。刺戟を求めて性や暴力を追う狂躁は、いま殆ど世界的といっていい。

世の中は娘が嫁と花咲いて

人間の命は地球よりも重い、という奇態なことばがある。

ひところテレビの通俗ドラマなどでときどき耳にしたが、いったいだれがいい出したことか。

地球は四十億人の人間を、ともかくものせて運行しているのである。その地球とたったひとりを秤にかけて、ひとりのほうが大切などという計算は、正常の判断では成り立たないであろう。地球だなどというだけキザったらしく、どうもよくわからない。

人間ひとりがどんな思いを残して死んだところで、地球は今後何千万年か何億年か、同

じような運行をつづけるはずである。その地球がほろびても、宇宙の巨大さにくらべれば小さなケシ粒がひとつ消えただけのことであって、銀河系の星々はあいかわらず輝いている。地球が消えれば人間の歴史など、あと形もなく没し去る。

煎じつめれば人間などアブクのような存在であり、その意味では蚊トンボやゲジゲジと何ら変るところはない。当人にとって人生がいかにかけがえがなくても、アブクはアブクである。

そのアブクの貴重さを保証して来たのが、西洋でいえばキリスト教の神である。神が人間を、つくりたもうた。ひとりひとりの人間は神の意志の実現だからこそ貴重なので、したがって自殺はキリスト教では許されない。神のあたえた生命を勝手にちぢめるのだから、重い罪と考えられる。その点はユダヤ教、回教も同じで、回教の教説では自殺は他殺よりもわるい。

仏教は逆に、人生はアブクにすぎないという事実を認識せよ、と教える。アブクだからこの世などどうでもいい、というのではない。そういう教えも浄土信仰にはあるけれど、仏教の本筋からははずれているだろう。アブクとしての自覚が逆に人生への本当の愛をめざめさせると、仏説は説いて来たように思われる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com